

■ 第45回城戸賞 応募作品

「PINKちゃん」

1

作… 菊池翔太



がいつしか定説となり、怯えた一部の市民が自警団を結成。色彩児やその親を追い立てていく。それを知った光太は、二人を助けに向かう。自警団に襲撃される二人を命からがら救出した光太、「もう一度父親になるチャンスがほしい」と結子と蒼に懇願。しかし次の瞬間、蒼は口を大きく開き、光太を頭から食べだす。あの説は本当で、光太は蒼に父親と認められないまま、息絶える。

■ 廃屋の裏

真つ黒な雨雲が、空を覆っている。  
野犬同士が交尾をして、野犬は交尾を  
やがて、雨が振りだすが、野犬は交尾を  
やめられず、その場で行為を続ける。  
：と、降る雨水の一部に、赤青黄その  
他、カラフルな色が混じっている。  
カラフルな雨水を被る野犬たち。  
カラフルな雨は一瞬でやみ、雨はまた無  
色透明に戻る。  
その状況に気づかないまま、雄の野犬、  
は絶頂に達し、果てる。

■ 牝の野犬の子宮・内

雄の精子が、子宮内に放たれる。  
と、その精子をカラフルな水が包み込  
み、やがて混ざりあつていく。

メインタイトル「PINKちゃん」

■ スーパー・店内

買い物のカゴを抱えた神代光太(32)、5歳  
ぐらいの男児と目が合い、固まっている。  
男児のぼろぼろのTシャツからは、青ア  
ザが覗く。戸惑う光太。  
と、そこに男児の父親が猛然と男児に駆  
け寄り、手を強く引き、店を去る。  
男児の父親「勝手にウロチヨロすんな！」  
光太、二人が去ったあと、動けないで  
いると、そこに神代結子(32)が現れ光太  
結子「どうかした？」  
光太「いや、なんでもない……」

■ 神代家・居間(夜)

テーブルに菜食中心の料理が並んでいる。  
それを神代夫妻と、光太の両親・明(60)  
と真弓(58)が囲み、それぞれ食べている。  
明「……どうなんだ？お前ら、子供のほうは」

結子「勿論、作るつもりですよ。ねえ」

光太「：：うん」

真弓「できないわけじゃないの？」

結子「それはまだ：：いけど、できなかったら

できなかつたで、いいかなって」

結子「不妊治療って、時間もお金もかかりま

すし、大変な思いして神経すり減らすぐら

いなら、いっそ二人きりで楽しく暮らした

ほうがいいかなって」

光太「それは、結婚前から話合ってたから」

明「精力が足りないんじゃないかねえのか？もっと、

肉とか食えよ、お前の料理は、全体的にな

んか小難しいんだよ」

光太「：：今、そんな話してないでしょ」

明「どうせ、お前のほうが及び腰なんだろ？

生活が安定するまでとかなんとかなんだ

あのお前の描いてる：：漫画？」

光太「イラストね。イラストレーター」

明「どうせ、そんな稼ぎになつてないんだろ。

そろそろやめて、ちゃんと就職しろよ」

光太「今更そんなの：：」

明「大体、お前そんな才能あるのか？ねえだ

ろ、俺の遺伝子継いでんのに」

光太「遺伝子とか、そういうんじゃないから」

会話、そこで途切れる。四人、気まずい

空気のまま、黙って食事を続ける。

### ■ 神代家・寝室（夜）

光太「全裸でなにやら筆笥を漁っている。

光太「今日はごめんね：：」

結子「別にいいけど：：光太くん、さっきか

ら何探してんの？」

光太「あった！」

光太「よかった、もう切らしてたかと思っ

結子「：：つけるの？」

光太「え？」

結子「今日、そういう話してなかった？」

光太「ああ、うん：：」

結子「：：やっぱ嫌なの？」

結子「：：嫌なの？」

結子「：：嫌なの？」

光太「嫌とかではないけど……」  
 結子「……もういいから」  
 光太「結子、布団を深く被り、そっぽを向く。」「産休にアになつたら悪いっていうか、女性」「いいから、今日はおやすみ。解散」

結子が熟睡する横で、光太は机に座り、液晶タブレットでイラストを描いている。テレビがつけっぱなしになっており、そこでは古い日本映画が流れている。光太、ふと映画のほうに目をやると、若い頃の松方弘樹が大立ち回りをしている。それを光太、作業の手を止める。寝ている結子を気にかけながら、タブレットで「パイプカット」と検索をかける。夜が明けている。欄が、パイプカットについて、サイトの埋め尽くされていく。光太、片っ端からそのサイトを見て、「配偶者の承諾」「同意書」といった文字が躍る。それを見て項垂れる光太。

■ 居酒屋・個室（夜）

高級感のある内装の店構えに戸惑いながら、酒を飲む光太。  
 田「と、そこに田狩正之（28）が入ってくる。」  
 光太「何もないよ、俺売れたいけど、本当そ」  
 田狩「仕方ないよ、俺売れたいけど、本当そ」  
 光太「嫌味ない奴だ、俺売れたいけど、本当そ」  
 田狩「だから、昨日の部屋整理してたら、出てきたんよ、あの時のやつ」  
 田狩「自分の靴から古びた演劇のチラシを引っ張り出す。天に向かかって手を広げ



妙光 妙  
連太 三配連  
「秘は「いる  
話あの漏分けて三つです  
早：受けない  
いほうがない  
いでしよ  
う？」

妙配連  
「は大きな病  
院にわざり  
なから聞  
く光太の  
心

■ 妙連クリニツク（夜）  
妙連「フリップを手に、プレゼンをして

■ 神代家・リビング（夜）  
結子「電話をかけているが、出る気配がない。諦めて電話切り、電気を消して寝

妙光 妙  
連太 連  
「はあ：「わ：  
「これ、名刺代わりですが」  
「対面するなり光太にパンフレット  
を差し出す。「妙連クリニツク・パイプカ  
ットの

田光 田  
狩太 狩  
「ビビり過ぎだつて。往生際悪いな」  
「と、妙連明人（58）が、冊子を片手に部屋

■ 妙連クリニツク・診察室（夜）  
光太「そわそわしている。座っている。光

田光 田  
狩太 狩  
「（ハツとして）帰る。おろしてください」  
一人で帰れないでしょ」  
光太「窓の外を覗く。道に、野犬やらヤ

田光 田  
狩太 狩  
「産婦人科医？ つか、妻の同意も、  
誰の同意もいらないで、パイプをちよん、  
てしてくれるお医者さん」

光太「ハツとして）帰る。おろしてください」  
一人で帰れないでしょ」  
光太「窓の外を覗く。道に、野犬やらヤ  
ギやら猿やらがうろついている。病院がある。  
車が停車する。妙連クリニツク」とい  
看板が掲げられた、古びた病院がある。





光太「……失礼だけど、そんな儲かってるよ  
うにも見えない。リスクと釣り合ってるよ」  
妙連「それなら簡単ですよ。私が、男性の味  
方だからです」  
光太「……」  
妙連「ご連絡、お待ちしてますよ」  
妙連、光太に連絡先の書かれた紙切れを  
差し出す。光太、それを思わず受け取る。

■ 神代家・リビング（朝）

寝ている光太、結子に体を揺すられ、慌  
てて目を覚ます。  
結子「ねえ！ テレビ見て！ テレビ」  
光太「え？」

光太、寝ぼけ眼でテレビを見る。  
ニュース番組がやっていて、老朽化した  
アパートが映り、警官が押し寄せている。  
T「5歳児童が父親殺害か 虐待の可能性も」  
結子「あれ、うちの近所だよね？」

被害者である父親の顔写真が映る。  
あの時、スーパーで見かけた児童の父親  
である。光太の脳裏にあの親子が浮かぶ。  
布を被せられ、担架により運ばれる父親  
の遺体の姿が浮かぶ。と、警察が担架を  
落としてしまい、遺体の姿が露になる。  
担架に乗っていたのは……光太の遺体だ  
った。

光太、思わず悲鳴を上げる。  
結子「……光太くん？」

光太、我に返り改めてテレビを見る。自  
分の遺体は幻で、遺体に布は被ったまま。

■ 神代家・寝室（夜）

光太と結子、ベッドの上に裸で寝ている。  
光太「……ごめんね」  
結子「大丈夫。そういう日もあるよ」  
光太「……結子さん、俺といて楽しい？」  
結子「当たり前じゃない……どうしたの急に」  
光太「……」

結子、熟睡している。  
その横で光太、妙連からもらった連絡先  
を、じつと眺めている。

■ 妙連 クリニック・診察室

気まぜそうに座る光太。その様子を笑顔  
で眺めながら、コーヒーを入れる妙連

妙連「必ずまた来て頂けると思っていましたよ」

光太「……手術しにきたんじゃないですよ？」

妙連「はいはい」

光太「……この間仰ってましたよね？ 男の味

方だって。あれはどういう意味なんです」

妙連「だって苦しそうにしてる。いろんな事

に「が」んじがらめで。みんなも、あなたも」

光太「……そんなこと……」

妙連「今の世の中、家族の在り方の多様な

んて騒がれていくが、実際のところは、そ

の自由は見せかけて、しかもその皺寄せが

すべて男性にきている。しかもその皺寄せが

光太「いや、別に思っているから……」

妙連「何を取れないの？ 私に聞きたいの？ あ

るわけでもないのに。私が聞きたいの？ あ

妙連「妙連、光太の胸の辺りを指さす。

な「あなたはどう振る舞おうか、周囲はあ

妙連「あなたが一辺倒の男にさせたがる。その

行きたく先は、父親だ。親になること、そ

一人前の男。なれない男は欠陥品。そんな

価値観にうんざりしても、なんともなく逃げ

られない。こんな時代に、子供を産むのな

んて、躊躇われないで、自然に」

妙連「コーヒーを注ぎ、光太を差し出す。

妙連「私は、男の代弁者だ。その退路を作る

お手伝いがしたい、それだけですよ」

光太「……」

妙連「子供なんて、作りたい奴に勝手に作ら

せとおけばいい……神代さんの思いと、何

か違ってますか？」

光太「……」

ト「光太、目を通す。患者と妙連の２パンフレット

写真たち。皆、楽しそうに笑っている。  
妙連、コーヒーに砂糖とミルクを混ぜ、  
飲みだす。

■ 妙連クリニック・廊下

光太、ストレッチャーの上に乘っかり、  
運ばれている。それを見下ろす妙連。  
妙連（声）「大丈夫……すぐ終わる。そしたら、  
思う存分奥さんを抱いてあげてください」

■ 妙連クリニック・手術室（夜）

光太、手術台に乗り、眠っている。  
妙連、光太が眠るのを見て、精子保管用  
のフリーズから、小瓶を取り出す。

■ 神代家・リビング（夕）

光太、リビングに座り放心状態。そこに  
結子が近づき、耳元で叫ぶ。驚き、我に  
返る光太。

結子「今日のごはん、光太くんだけだ」  
光太「ごめん……」

結子「そんなに謝らなくていいけど……最近、  
ぼーっとしてない？大丈夫」

光太、結子に近づいて背後から抱き締め  
る。驚く結子。

結子「待って、ガス止めなきゃ……最近変じ  
やない？もしかして、こないだのこと、気  
にしている？……私も、焦りすぎたかなって」

光太「もう、買ってこない」

結子「……いいの？」  
光太、頷き、結子に力強くキスをする。

■ 神代家・寝室（夜）

裸の二人、ベッドで重なっている。光太、  
結子に向かって腰を振っている。

結子「（あえぎ声を押さえながら）……やっぱ  
り、つけないと違う？」

光太「（ハアハア言いながら）全然、違う」

結子「そうなんだ」

光太「結子は？」

結子「……違う、かも」  
光太「あっ、ヤバ……」

光太の腰を振るスピードが早くなる。

■ 神代家・寝室（引越後・夜）

そこから、一年後。  
二人のいる部屋が変わっている。全体的に広く、小綺麗になっっている。新しいベッドの上で、光太と結子。

光太「新しいベッドの上で、光太と結子か」

光太「出る、出る……」  
光太「果てる。息を荒げたまま、結子から離れる。光太は満足げだが、結子の顔はどこか寂しげ。

と、そこでテールに乗った光太のスマホが鳴る。光太、スマホを見る。

結子「締め切り？」  
光太「新しい依頼っぽい。ヤバい」

結子「無理しないかね」  
光太「今頑張らないで、いつ頑張んの」

光太「裸のまま、部屋からいく」  
一人になっちゃった、結子、自分の股から溢れた

精液をすくい、それを眺めている。溢れた

■ 広告代理店・会議室

机に広げられた、ショットピングモールのキャンペーンのポスター。大々的に描かれた、ほのぼのとした親子のイラスト。

光太とマネージャー、広告代理店の社員

代理店の男が、そのポスターを眺めている。社員

庭こう社員「いやあ、素晴らしい。家

光太「だっ絵を描ける人って、すごい家  
顔で聞いています。話、満更でもない

■ 神代家・トイレ

便器にまたがる結子、妊娠検査キットを覗く。だが、ラインが出ていない。結子、ため息をつく。

■ 結子の実家・キッチン（夜）

結子「結子と、結子の母・能見瞳子（59）、横並  
びで、揚げ物を作りながら話している。  
瞳子「そんなんに悩むなら、病院行けばいいじ  
ゃない。子供のこと、私に言われてもね」  
結子「……でも、光太くんと約束したし」  
瞳子「そんなこと気にしてどうすんの？ あん  
た、真面目すぎんよ。結婚する前の約束  
なんて、殆どあってないようなもんでしょ」  
結子「……」  
瞳子「それとも旦那は、昔の約束を頑なに信  
じて、あんたの話に全く耳を傾けてくれな  
いような酷い奴なの？ 違うでしょ？」  
瞳子「結子の口に、揚がった唐揚げを一  
口分入れる。結子、熱がりながら、首を  
横に振る。」

■ 神代家・リビング（夜）

光太「会う結子は、箸の進みが遅い。向かい  
よつと、味濃すぎかなあ。」  
結子「……」  
光太「……作ってない俺が言うことじゃないか」  
結子「……」  
光太「……え？ 勿論勿論。当たり前じゃん」  
結子「……いやっば、どうかかな。お金の問  
題とかもあるし」  
光太「俺今引っ張りダコだよ？ 遠慮しないで」  
結子「あのね……」  
結子「光太に冊子を差し出す。光太、キ  
ョトンとしながらその冊子を開く。それ  
は、不妊治療についてのパンフレット。」

■ 神代家・仕事部屋（夜）

光太「逃げるように仕事部屋のなかに入  
ってきて扉を閉め、鍵をかける。  
結子が、扉を外から激しくノックする。  
結子（声）「逃げないでよ！」

光太「逃げてないよ！仕事が詰まってるの！」  
結子（声）「最近家事ももうほとんど私任せ！  
当番制って約束でしょ」

光太「約束破ってんのはそっちじゃん！子供

のことは、結婚前に何度も何度も……」

結子「……じゃあ何？もし私が子供は絶対ほ

しいって言ったたら、私を選ばなかったの？」

光太「その話はまた今度！ね！」

光太、結子のノックを振り切り、パソコンに向

かう。だが、画面が親子イラストのまま

フリーズしている。光太、焦って周辺を

いじるが、今度は画面自体が落ちる。怒

った光太、キーボードを殴る。

#### ■ レディースクリニック・レントゲン室

検査台で横たわる結子の側に、男性医師・

森島「森島（44）が立っている。」

森島「それじゃあ神代さん、造影剤、入れて

結子「はい……」

結子、巻きタオルごしに、薬を注入され

る。苦痛で顔を歪める。

#### ■ レディースクリニック・診察室

結子と森島、向かい合っている。

森島「神代さんの卵管は無事通っていました

し、子宮も問題ありませんでした……」

結子「そうですね……」

森島「……となると、一度旦那さんにも来て

結子「……すみません、またご相談します」

結子、立ち上がり、慌てて部屋から出て

いく。森島、止めようとするがかなわず、

その場に立ち尽くす。

#### ■ 喫茶店（夜）

空のグラスを前に、液タブで作業をして

いる光太。店員が、おそるおそる光太に

近づいてくる。

店員「お客様、閉店ですので……」

光太、時計を見る。0時を回っている。

■ レディスクリニック・診察室

暗い部屋の中、並べられた十数枚のカルテを見ながら怯える森島。と、部屋の奥から、動物の喉を鳴らす音が聞こえる。森島慌てて振り返る。仕切カーテンの影から、光る目が森島を睨む。

■ 神代家・寝室（夜）

光太、そっと扉を明け、忍び足で結子の寝ているベッドに近づく。結子の顔を覗きこみ、眠っていることを確認してから、自分もベッドの中に入り、結子に背を向け目を瞑る。だが結子、実は起きており、光太が寝た瞬間、目を開ける。

■ 居酒屋・個室（夜）

酒を一気に飲み干す光太。大分酔っぱらっている。向かいで呆れる田狩。

田狩「そんなんシラ切り通すしかないでしょ」

光太「簡単に言わないでよ……」

田狩「言っとくけど、決めたのはあんただ」

光太「わかってる……」

田狩「そうだ、選択肢はもう一つあるけど」

と、そこに、若い女性が二人、部屋の中

に入ってくる。

光太「え？なにこれ……」

田狩「おーよく来た、座れ座れ」

女性たち、光太と田狩それぞれの隣に座

る。困惑する光太。

光太「ちよつと、なんだよこれ」

田狩「まあまあ、せっかくのチャンスなんだ

し、遊んじゃいまして？おい、この人、神

女性「光太先生。知ってんだろ？」

光太「……うん、知らない」

■ 結子の実家・リビング（夜）



結子と瞳子、食卓に座り、食事をしている。瞳子、浮かない顔で食べる結子を、心配そうに見ている。瞳子「悪いほうの予感、当たっちゃったか」結子「違うよ！」瞳子「じゃあ、仲直りすればいいじゃん！」と結子、急に顔色が変わって立ち上がり、部屋を飛び出していく。瞳子、驚きながらも、結子の後を追う。

■ 居酒屋・個室

田狩のスマホが鳴る。田狩、着信の欄を見て、電話に出ず切る。女性2、光太を脇に追い詰めるぐらい近づき、胸を押し当てる。困惑する光太。田狩「奥さん以外の揉んでみるのも、精神衛生上いいと思いますよ？」

光太「……悪い、やっぱ俺、結子さんの以外、揉みたくないみたい。ごめんね！」

女性2「……慌てて個室から出ていく。」

田狩「2：：何あの童貞？キモっ」

田狩「と、また田狩のスマホが鳴る。田狩、うんざりしながら電話に出る。田狩、うんざりしながら一回出なかつたら出たく

ないんだって察しろよ！：：は？」

田狩「待って待って待って！そんなわけ：：」

■ 結子の実家・トイレ（夜）

結子、便器に向かって嘔吐している。

■ 神代家・玄関前（夜）

光太、ドアノブを握りながら、立ち尽くしている。家の中は灯りが消えている。物音を立てないよう、ゆっくりノブを回すが、そこでスマホが鳴る。光太、慌てて電話を取りだし、電話を切ろうとするが、慌ててなかなかきることができない。

■ 興信所  
 延田「強く見つけたい。奥さんとは、  
 光太「性交渉がないのに子供が生まれた、と？」  
 延田「ああ、避妊はしてました」  
 光太「避妊なしでセックスして、奥さん  
 延田「妊娠されて、自分の子供じゃない、と？」

■ 神代家・廊下  
 結子「ねえ、それだけ？ 他になんかないの？」  
 光太「まだ締め切り詰まってるし、スマホも  
 替えに行かないと……なんかの間違いかも  
 結子「間違ったって何？ 子供のじやん！ 慎重に  
 行こうって言ったおめどーぐらい言っ  
 結子「とりあえず、おめどーぐらい言っ  
 光太「仕事部屋に入り、扉を閉める。  
 結子「扉の前でへたり込む。

着信の相手は、田狩だ。  
 光太「電話にしようとする、家の灯り  
 結子「おかえり」  
 光太「……ただいま」  
 結子「出ないの？」  
 光太「いや、大丈夫。起こした？」  
 結子「このまま、一生話さないで過ごす気？」  
 光太「違う、ずっと話さなきゃいけないと思  
 結子「……で、生活ペースとかあるし……」  
 光太「……持ってきたみたい」  
 結子「……液晶  
 に大きなヒビが入り、着信も止まる。

光太「はい」  
延田「はい」  
延田「はい、わかんないな、何故自分の子供は  
やないと思われるのか。えーと、奥さんは  
結婚前から相当男遊びが激しかったとか」  
光太「結子さんは、そんな人じゃない！」  
延田「（困惑）：それじゃまあ、一応奥さん  
の身辺は調査いたしましたすけども」

■ タクシー  
人気がない公道を走るタクシー。  
後部座席に乗り込む光太、電話をかけ続  
けるが、一向に出る気配がなく、苛立ち  
を募らせる。  
運転手「：俺も結構長いことこの辺走って  
るけど、この辺に産婦人科なんてあるか  
な？」  
光太「：あ、そこ、右」  
タクシー、道を曲がる。

■ 田舎道・公道  
光太、キョトンとしながら、車を降りる。  
光太「：うそだ、確かにここに」  
運転手「：ほら何もねえ。こんなところで赤ちゃ  
ん生む物好きいねえよ、寝ぼけてんのか？」  
光太がキョロキョロする前に、更地が広  
がっている。あった筈のクリニックがな  
い。

■ 町中  
結子、瞳子を連れ、歩いていく。だが、  
足を止める。と、眼前に全くの更地が広が  
っている。困惑する結子。  
瞳子「：ない、病院」  
結子「：嘘、絶対あつたんだって！」  
瞳子「：ま、あ、ない、病院」  
結子「：の助産院紹介してあげることから」

■ 交番（夜）

警官がうとうとしていて、ボロボロの白衣を着た、小汚ない中年男が駆け込んでくる。困惑する警官。男、顔を上げ、警官にすがりつく。ボロボロのその男は、妙連だ。ポロのお願いです、助けてください！……捕まえてくれたっていい！……捕官「え？あんな何したの？」……妙連「お願いです、助けてください……」

■ 繁華街（夜）

光太、虚ろな顔で、人通りの多い町中を彷徨っている。町行く人々の声が、光太の耳に入ってくる。急すぎじゃない？何したの？「絶対ヤバい理由だった」  
「どうせ、ドラッグか女でしょ」  
光太、ハッとなり、振り返る。  
ビルの巨大ビジョンで、ニュース速報が流れている。  
「俳優・田狩正之 無期限の活動休止を発表。理由は公表せず」  
愕然とする光太。

■ 化粧品会社・オフィス（夜）

結子、男性の同僚・小野田（26）と、二人きりでプレゼン用の書類を作成している。背後では、帽子を目深に被った作業員が、その点検作業を行っている。  
小野田「すみません、こんな時間まで付き合わせちゃって……」  
結子「いいんだって。好意には甘えるもんよ」  
小野田（声）「……旦那さん、まだ帰ってこないですか？」  
結子「まあね……」

■ ネットカフェ（夜）

狭い個室の中、光太は虚ろな顔でひたすらPCで仕事の絵を描いている。

■化粧品会社・オフィス（夜）

作業員「作業員、二人の話を聞きながら、急に道具をしまいだす。」  
結子「あ、そうでしたので帰ります。」  
作業員「その作業員、そそくさと部屋から出ていく。」  
小野田「え？なんの話？」  
結子「その作業員の顔が少し覗く。延田だ。」  
小野田「神代さん、全然大事にされてない。」  
小野田「延田、結子のことをまっすぐ見つめる。」  
延田「延田が弄ったっつに、盗聴機がとりつけられ、作動している。」

■興信所

延田「調査報告書を、読んでいます。」  
結子「誰か特定の男性と密に連絡をとったり、会ったりした形跡はありますか？」  
光太「？もう子供の父親と切れている可能性だってあるでしょう。」  
延田「確かに、彼女が周到に証拠を隠滅して、特定することは不可能です。私が追加の調査は不要だと考えます。」  
光太「なんで？金は払うから！」

延田「スマホからレコーダーを起動し、音声再生する。結子と小野田の会話が聞こえてくる。」

小野田（声）「……申し訳ないけど、旦那さんは酷い奴だと思えます。」

結子（声）「小野田くん……」

光太「……これは？」

延田「会社で盗聴機で拾った、結子さんと同僚の会話です。」

小野田（声）「俺なら神代さんのをもっと……」

結子（声）「小野田くん……」

小野田（声）「神代さん！」

光太「ほら、なんかいい雰囲気じゃん！」  
延田「最後まで聞いて！」  
結子（声）「……ありがとう。でもね、彼はまだ覚悟が持てないだけだと思う」

× × ×  
フラッシュバック。あの夜のオフィ

結子「ほら、彼カッコつけで、立派なこと言  
いたがりだから。現実と、自分が言っ

小野田「……普通に、カッコ悪くないっすか？」  
結子「超カッコ悪いよね。でも、そういうと

結子「私も含めてあの人だから」  
結子「だから、自分の腹をさする。」

× × ×  
合いがついたら、ちゃんこの子の父親にな  
なっってくれるって、私は信じてる」

延田「これでも追調をご希望ですか？何をそ  
んな疑心暗鬼になっっているんです？」  
光太、急に立ち上がり、部屋を飛び出す。

■ 路地（夕）  
光太、全速力でダッシュし、家路を急ぐ。

■ 神代家・リビング（夜）  
結子、電話をかけているが、出る気配が

ない。電話を切り、ため息をつく。  
と、そこで玄関の扉が開く。光太が、息

を切らしながら、入ってくる。光太、そ  
の場に膝から崩れ、そのまま土下座する。

結子「ごめんなさい、一週間消えて……結子  
さんの言った通りだ。怖かったんだ」

光太「……正直言うのと、今も怖くてたまらな  
い。こんな世の中で、自分が親になっ  
て、子供を育てるなんて。考えるだけで、怖く

■ 神代家・すっぴんが  
光太「大きくなった結子のお腹

■ 神代家・キッチン  
光太「たまごクラブを讀みながら、妊婦  
用の食事を「結子が待ち構えている。

■ 育児セミナー・会場  
光太「参加型の育児に参加している。講  
師がする講義を一心不乱にノットとり、  
時には挙手をする。

光太「薄味：立ち上がり、キッチンに向かう。  
：「薄味：立ち上がり、キッチンに向かう。  
：「薄味：立ち上がり、キッチンに向かう。」

結子「作ってよ。ずっと私作ってたんだから。  
光太「え？」お腹減った  
結子「それ、ちよつと都合よすぎじゃない？」

親「は、それ、そのために頑張る：今のとこ  
親「は、それ、そのために頑張る：今のとこ  
親「は、それ、そのために頑張る：今のとこ  
親「は、それ、そのために頑張る：今のとこ  
親「は、それ、そのために頑張る：今のとこ

光太「結婚したからハッキリさせよう？ 本  
光太「結婚したからハッキリさせよう？ 本  
光太「結婚したからハッキリさせよう？ 本  
光太「結婚したからハッキリさせよう？ 本  
光太「結婚したからハッキリさせよう？ 本

結子「言ったけど、いざ本  
結子「言ったけど、いざ本  
結子「言ったけど、いざ本  
結子「言ったけど、いざ本  
結子「言ったけど、いざ本

に耳を当てている。「動いた！」と、嬉しそうに互いの顔を見合わせる二人。

■ 助産院・廊下（夜）

ストレッチャーに乗って運ばれる結子、痛みを耐え、唸っている。

光太「運ばれる結子の横を並走している。

結子「どう？俺、合格かな？」

ストレッチャー、病室のなかに入っている。

光太も、ついていく。

■ 助産院・分娩室（夜）

結子、分娩台の上でいきんでいる。

助産師と看護師が、子供を取り上げよう

として、いる。そしてその傍で、光太も立ち

会っている。緊張の面持ちで見守っている。

助産師「はい大丈夫だから、もうすぐ出てく

るからねーはい大丈夫だから、もうすぐ出てく

助産師と看護師、絶句し、顔色が変わる。

看護師「先生、コレって……」

助産師「（小声で……）連絡してきてくれる例

の人のところ、早く！」

結子「看護師、慌てて部屋から出ていく。

助産師「全然大丈夫だから、もう一息！」

■ 生物研究所・研究室

真木「カップ焼きそばを食べながら、研

究台を見つめてやる。

真木「……まるで信号だね、なにかの」

博士「ここに動物の検体だけなく、今まで発

見された動物の中に、ただの一匹もメスが

いないんですよ」

真木「雌雄全体のことじゃなくって？」

博士「いえ、全部雄です、彼らは……」

試験台の上には、犬や猿などの動物の死

骸が並べられている。彼らの身体は、赤、

青、黄と、それぞれの色で染まっている。



真木「の股間にペニスがある。一体一  
と、真木のスマホが鳴る。メッセ  
入っている。真木、その内容を見て  
顔になる。苦い顔で電話を切り、残  
焼きそばを一気に啜り、食べ終ると、  
すぐに部屋を出ていく。

■ 助産院・分娩室（夜）

結子の体から、赤子の頭が顔を出す。そ  
の飛び出した赤子の肌の色は、人工的で綺  
麗な真つピンクをしている。人工的で綺  
麗な真つピンクをキョトンとなる光太。自  
分の目を擦る。

助産師「（戸惑いながら）：おめでとうござ

います、元気な男の子です。おめでとうござ  
助産師、おぎやあおぎやあと鳴く赤子の  
顔を、結子に向ける。結子、赤子を黙っ

光太「あの、結子：：」

光太「え？」

結子「頑張ったね、おめでとう」

結子「頑張ったね、おめでとうに向ける。

光太「どんな表情をしたらいいかわから

ず、引きつる。抱かないの？」

光太「泣く赤子と目が合う。光太、思わ

ず目を逸らす。

助産院・新生児室

×ピンク色の赤子、ベッドで眠っている。  
×××  
待ちぼうけする光太と結子。光太は落ち  
着きがないが、結子は嬉しそうに手帳を  
眺めている。

結子「名前、やっぱりこれかねえ」

結子、光太に手帳を広げて見せる。名前の候補が並べられ、第一候補の欄に「蒼」という名前が記されている。それを見て、顔を歪ませる光太。

光太「いや蒼、って……」

結子「何その反応。二人で話し合ったじゃないよ」

光太「いや、今考えるとあんまりよくないよ」

結子「それが……男か女かよくわかんないし」

光太「それがジェンダレスっぽくていいって、光太くんが言ってたんじゃないか？」

結子「なにが？」

光太「なあ……本当にわかってないのか？」

結子「なにが？」

と、急に部屋の扉が開き、真木が入ってくる。二人、真木の登場に呆気にとられる。真木、二人の対面に座る。光太と結子、真木の口許にソースとおかかがついて

真木「どうも、遅くなりましたー。今日いろいろ立て込んでまして」

結子「……あの、どなた？」

真木、名刺を二人に差し出す。肩書の欄に「厚生労働相 育児特別対策室」と書かれて

真木「どうしたの？私の顔に何かついてる？」

結子「……ついて、ます」

真木、ハツとなり、慌てて自分の口許を袖で拭う。

真木「あーもう、私いつもこう！慌てて食べたから……どう？とれた？」

結子「とれました……」

真木「まあ、こんなソースべったり女にいきなりなんかよくわからない名刺見せられて

結子「いや、そんな」

真木「でも、奥さん、落ち着いてるね。強い」

結子「どういこと？」

真木「……旦那さん、まだ言っていないの？」

光太「だってこんなの……どう言えば」

真木、自分の鞆から写真を取りだし、結



結子「どれぐらい？」  
光太「まっぴんぐ。コラックぐらい……」  
結子「どういうこと？ 顔が消える。変な病気？」  
真木「いいや。健康にはなんの問題もない。直ちに死んだりもしない。あなたの子は、ちよつと変わってるだけ」

呆然と立ち尽くす結子。

結子「……眠い」  
光太「え？ 今？」  
結子「あとでいいかな？ ちよつと寝かせて」

光太、急にまだらみだした結子を受け止めて、歩き出す。  
残された真木、眠っている赤子のことを見つめ、微笑む。

### ■ 助産院・病室

光太、ため息をついて部屋に入ってくる。ベッドでは、結子が眠っており、その傍で真木が見守っている。

真木「……色彩児」  
光太「え？」

真木「調査室では、そう呼んでいます。色彩児の仮の呼称ですけれど、研究段階です。色彩児まで仮の呼称です。まだ研究段階です。色彩児もそう思うけど。彼は、全員ここに私の生れまじり。彼らは、全員ここに私の間に生れまじり。今んとこ、日本だけの現象のようです。すでに政府主導で研究チームが立ち上がっています。我が特別育

児対策室です。設置されたのが、我が特別育ア対するために設置されたのが、我が特別育とは別に生まれてきた赤子やその両親をケ

光太「……原因は？」

真木「まだ研究の途中で、ハッキリとは答えられないんです。結局何もわかってないってこと

真木「……健康に不安がない？ よく言える

真木「うーん、」  
 光太「そうです。このお役所仕事って、一度フリ  
 やないですか？緊張がない。一度子供  
 ランスで働いてきたら、いんだよ。子供  
 があんな姿で産まれてきて、親がどんな気  
 持ちか、あなたにわかりますか？ねえ！」  
 真木「怯む光太。壁を思いきり叩く。その態度  
 真木「そうです。ね、あんな色の存在が自然発  
 生するわけじゃないです。ねえ」  
 光太「……は？」  
 真木「……そう例えば、人為的な遺伝子操作  
 をして、それを人体に組み込む手術をする、  
 とか？まあ不確かな情報ですが？例えばど  
 こか変な病院で何らかの治療を受けたとか」  
 真木「何か当たりがあるんじゃない？」  
 光太「……」  
 真木「その顔。この話聞いた旦那は、みんな  
 同じような顔をするの。奥さんにも同じ話、  
 する？どうする？」  
 真木「光太、何も言い返せない。  
 真木「曖昧なままのほうがいいことも、世の  
 中にはあるよね。一つのことです。びっ  
 と、結子が急にむっくり起きだす。びっ  
 くりし、焦る光太。  
 光太「（おそるおそる）……おはよう」  
 結子「……会いたい」  
 光太「え？」  
 結子「私、蒼に会いたい！会わせて！」  
 ■ 新生児室  
 光太「下ろしている。ベッドで寝そべる赤子を見  
 結子「……なんかね、起き瞬間思ったんだ……  
 あれ？真木さんにそうって聞かされるまで、  
 蒼のこと普通に思ってたのに、ていうか、  
 未だ私には普通に思ってたの、人にそう、

言われたらだけで、何に対しても思いついたら、蒼に会いたくたって、まらなくなつた。キュン、つて」  
光太「普通の子どもじゃない。世界一可愛いじゃない！遅れちゃった」  
結子「少し遅れちゃった」  
光太「名前、もう蒼で決定なんだ……」  
結子「ほら蒼、お父さんだよ」  
結子「赤子を光太に近づける。光太を見つける赤子。苦笑いする光太。」

■ 助産院・病室

病室が整頓されている。結子が蒼を抱っこ紐で携え、光太は荷物を持つている。光太「本当に連れてかえって大丈夫なの？」  
真木「わかりました……一週間。一週間だけ、なるべく人に会わせるのは控えてください」  
結子「一週間待ったら、何があつたんです？」  
真木「きつと、誰も息子さんを不思議がったりしなくなると思ひますよ」  
光太「は？」  
真木「それじゃあ私はここで帰りますから。奥さん、なにかあつたら連絡ちょうだい」  
結子「お世話になりました」  
光太「この人が何をお世話したんだよ……」  
結子「ほら蒼も、おばちゃんにさよならして」  
蒼、真木が顔を近づけると泣き出す。慌てて蒼をあやす結子。  
真木「……私、もとからあんまり子供に好かないタイプなの、ごめんね」  
結子「ありがとうございまして」

■ 助産院・ロビー

出口に向かう神代一家。  
光太、なるべく蒼を隠すように結子の前を歩くが、ロビーで待つ患者たちが奇異

の目を向ける。光太は困り顔だが、結子は堂々としている。

■ 対策室

星山（☆）によって職員に、レジュメが配布されていく。その中に混じる真木、苦い顔でレジュメを眺めている。

平坂「職員の前、平坂（☆）が立っている。」「  
「マスコミ各種媒体に沿った形の情報が、  
「色彩児（仮）の件について対応する職員の色  
「たちには、混乱をきたさないためこの情  
「報をきちんと頭に叩き込み、何を秘して何  
「を明示して世間に伝えるか。」「  
「ないよう徹底してもらいたい。」「  
「かっつてんのか！」「

返事を揃える。平山に臆しながらも「はい」  
平坂「返事はちゃんとしろよ！皆から何かあ  
真木「：：：こんな目眩まし」

平坂「じゃあ、あんたどうすりゃいいと思う？」  
真木「：：：現段階で知り得た情報を、一刻も  
平坂「あ？」

真木「もし、後に情報の隠蔽だなんだと騒が  
平坂「知らせてどうなる？」

平坂「誰かに危害は及んだか？あのガキども  
が誰か殺したのか？あいつらは危険分子な  
ので、親御さんは今すぐ殺せって、政府が

真木「そんなこと言っていないでしょ！ただ、  
少しは嘘をつき続けなきゃいけない、現場  
のことも考えて言ってるの！」

平坂「キャンキャン騒ぐんじゃねえよババア」  
真木「ババアって：：：」  
星山「うちの職員が：：：申し訳ありません」

平坂「おばさん、子供は？」  
真坂「それ、今答える必要ある？」  
平坂「いないけど、いらないの？」  
真坂「俺はいるよ」

平坂「それ、俺の部屋から出てい  
たよ」  
平坂「あれ、俺の部屋から出てい  
たよ」

平坂「それ、俺の部屋から出てい  
たよ」  
平坂「あれ、俺の部屋から出てい  
たよ」

■ 神代家・リビング

ついでにテレビでは、ニュース番組がやっ  
ていた。太の両親、結子の腕の中の蒼を呆然と  
している。

結子「あ、ごめんさい、私ちよつとお  
っぱいあげて来ちゃいますね」  
光太「え？ 結子さん？」  
真弓「ああ、はい」

結子「失礼しましす」  
結子「蒼を抱き、別の部屋に移動する。  
結子を見送ったあと、静まる三人。この！

光太「どうも？」  
光明「どうも？」  
光明「どうも？」

真弓「ええ、あれ」  
真弓「あれ、あれ」  
真弓「あれ、あれ」

キャスター「続きましては、今週の徹底取材！  
最新のネットでは、今週の徹底取材！  
最新のネットでは、今週の徹底取材！

目撃情報が上がった。赤い日本中、  
目撃情報が上がった。赤い日本中、  
目撃情報が上がった。赤い日本中、

体彼らはなにか？ 調査の結果、驚きの  
目撃情報が上がった。赤い日本中、  
目撃情報が上がった。赤い日本中、



事実が判明した」  
三人、不安な顔でテレビに見入る。  
テロップ「今、カラフルベイビーがヤバイ？」

■ ニュース番組

医師「医師が、色彩児を抱っこしながらインタビューに答えている。産後の経過を見ても、健康的には何の問題もないですね。肌の色以外は、本当にごく普通の赤子と捉えていた

医師「赤ちゃんの親はどんな方？」  
「だいて大丈夫です」  
「赤ちゃんのお父さんお母さんです。彼らにご両親も、いたって健康でした。彼らに」

× × ×  
学者「色彩児が生まれる原因は？」  
「インタビューに答えている。突然変異としか言いようがない」

学者「なぜこのような色に？」  
「原因としては、アルビノ、白皮症の一種と、いうのが考えられるかもしれない。ただ、アルビノが遺伝情報欠損によって

白くなるわけですが、このような色彩になるには、むしろ彼らは遺伝子が情報過多になっ

「健康的な影響は？」  
「T「健康的な影響は？」  
学者「それは追って研究の必要がありますが、今のところ問題はありませぬ」

■ 対策室

テレビで、学者のインタビューを見ている真木と星山。

真木「こんな御用学者、どこで見つけたの？」  
星山「なんかそれっぽい肩書きと、面の皮の厚さ、あとメディアへの露出量。それが世間の、学者への信用の担保だから」

真木「ちゃんとした研究者が反論するでしょ」  
星山「何が正しいのかを判断するのは理屈じゃない。宣伝量と、なんとなくそれっぽい

説得力だ。特にこの先生はいい。とにかく顔がいいし、噛まない。こんなデタラメでも堂々とまくし立てれば、何かまともなことを言ってる感じがする。根性が据わってる」

真木「こんな子供騙し、ずっと続けるつもり？」  
山「確かに今は子供騙しだ。けど、こんな感じの番組が連日放送されればどうなるか？いつのまにか、彼らはアリのさであるんだ。いつの間にかそんな空気ができあがる。そういうもんです」

星山「テレビを指差す。」  
コメントとしてスタジオに座るモデル系タレントが、コメントをしている。キャスター「でもYANOさん、やっぱりこういう色だと、やっぱりまず何より心配が先に立ってしまふような気がします」  
モ「かは一且置いといて、やっぱりこう写真並べてみると、結構ちゃんとおしゃれって言うか、毎んな子供生まれたら毎日楽しいと思う。毎日パーテイ気分というか」

星山「息をつく。大笑い。真木、それを見て溜息をつく。今日は時間稼ぎをして、国民を不安にさせないことだ。その間に、きちん」と調査をし、解決の糸口を探る。それが我々の仕事だろ？」

■ ニュース番組

様々な人々に対する、街頭インタビューが行われている。女子大生、自分のSNSを見せる。色彩児との2ショット。#colorful\_babyというハッシュタグつき。  
女子大生「今日、友達に撮らせてもらいました。なんか運気めっちゃ上がるらしくて」  
フリーター風の男・大村豊（38）が、イ

大村「非常に危険です。何故そんな奴らを受  
け入れられるんです？ 気持ち悪いでしょ！」  
大村「あれがカメラに顔を近づける。  
れは極論ですが、危険が拡大する前に……」  
インタビューが途中で途切れる。

中年女性「そうねえ、私は子供もう生まない  
からどっか他人事だけど、でも肌の色とか  
関係なく、どうせみんな違ってきちゃうん  
だからあんまり気にしないでほしいですね」

ナレイン「ケイション」ということで町行く人百人に  
フルベイトをとった結果、53%の人がカラ  
ことが明らかにになりました」

■ 神代家・寝室（夜）

光太「暗い部屋に入っている。結子と蒼が、そ  
れぞれ眠っている。蒼の顔を覗き込む。  
光太「……いい気なものだな」

■ 神代家・玄関

更「二年後」。  
ス「ツ」に替えた結子が、バタバタと慌  
てながら靴を履いている。大丈夫かな、  
結子「近所でもダメマ扱いやないから。こ  
う私「もう、そんな時代じゃないから。こ  
う光太「もう、見れるほうが見とくべきでしょ」  
二歳半に育った蒼が、おぼつかない足取  
り「で歩いてくる。蒼が、おぼつかない足取  
結子「蒼、お母さん行ってくるね？」  
光太「蒼と光太、結子に手を振る。」

■ 公園  
パパ友たちが、自分の子供を遠巻きに見な  
うがら雑談している。流行らせよ  
とでも、実際下火でしょ？流行らせよ  
と流らせよ、せよとエミエ、誰が？

光太「ほら、その看板に無邪気に触れる。  
光太、蒼の手、蒼の手を引き、看板から離す。蒼  
の手、かなり汚れていて、光太は、自分  
でも看板をなぞる。看板に、埃が厚めに  
溜まっている。正直流ってないじゃん？  
あのカラフルベイビ」

■ 大通り

砂場で、子供たちが遊んでいる。その中  
で、一目を引く蒼。その中  
に、子供たちの様子を見守っ  
ている。その中に、光太も混じっている。  
「いやあ、いつ見ても綺麗ですね」  
「はい、ありがとうございます」  
「うちはちょっと、まだ……遅れ  
てみたいですね」  
「個人差ありますから、まあ気  
にする必要もないと思いますけど」  
「蒼、そろそろ帰るよ」  
「蒼が、光太にとことこと駆け寄ってくる。」

パ パ て  
パ ば 2 ー いうもんでしょ？  
パ 1 ー 遅れてるだろ、未だ喋れないって、やっ  
パ 1 ー 色がアレの子は、全員そうだって」

■ 神代家・仕事部屋

誰もない仕事部屋の中。部屋の外から、光  
太が電話をする声が聞こえる。  
蒼が、部屋の画面に入ってくる。  
蒼、パソコンの画面に見入る。  
光太の描  
き途中のイラストが見える。ファミリ  
が集めるイラストで、子供にはそれぞ  
れ、明るめの色が塗られていく。  
蒼、パソコンに近づいていく。だが、途  
中で机にぶつける。書類が散乱する。そ  
の間に、光太の昔の演劇のチラシが混じ  
っている。蒼、それを発見し、見入る。

■ 神代家・リビング

光太「いや、色抜くだけならすぐ終わるから  
いいんですけど、なんでその……」  
マネー「ジャー（声）」先方が依頼くれたのって、  
もう三か月前じゃありませんか。その時はカ  
ラフルベイビーでいきましようってノリノ  
リだったんですけど、さっきラフを見たら、

難色を示されて……あと、なんていうか、  
最近そういうのにクレームも増えてるって  
光太「そんな一部の変わった奴らの意見……」  
マネー「ジャー（声）」とにかく、ごめんなさい。

神代さんは当事者なのに……」  
光太「悔しげに電話を切る。」

■ 神代家・仕事部屋

光太「おおい！」  
光太「乱暴にペンタブを蒼から取り上げ  
る。部屋は散らかっており、蒼がペ  
ンタブを弄り、光太のイラストの隣に落  
書きをしている。」



冬美「この色、私にはちやんと赤く見えてる。

冬美「この色、私にはちやんと赤く見えてる。

冬美「よかったです。よかったです。私たちと同じ」

冬美「よかったです。よかったです。私たちと同じ」

冬美「よかったです。よかったです。私たちと同じ」

冬美「よかったです。よかったです。私たちと同じ」

■ 対策室

真木「部屋に戻って来ると、職員数人が、

職員1「これ：：まぶくないっすか？」

職員、真木にタブレットの映像を見せる。

■ 動画投稿サイトの映像

暗い林の中で、若者たちがカメラを回し

野犬の悲鳴が聞こえる。野犬同士が争っ

ている。やがて、片方の犬の手足や肉片

が飛び散る。「マジやべえ！」

カメラが、おそろおそろ食べる野犬に近

づく。その野犬は、毛並が青色だった。

若者が悲鳴を上げ、映像が途切れる。

■ 記者会見場

田狩「つれた田狩が、壇上に登壇する。

田狩「つれた田狩が、壇上に登壇する。

田狩「つれた田狩が、壇上に登壇する。

田狩「つれた田狩が、壇上に登壇する。

田狩「つれた田狩が、壇上に登壇する。

田狩「つれた田狩が、壇上に登壇する。

記者たちが、それを聞き、ポカンとする。

■車・内

星山「助手席に星山が座っている。真木が車を運転し、真木、畜生、なんでも今頃あいつが……」

■神代家・仕事部屋

結子「結子、家に帰ってくる。」

光太「ただいま」

レビ「机の上で突っ伏して寝ている。テ

再放送がやっばい。その傍で、蒼がノ

トにクーパーで落書きをしていて。

蒼、頷く。結子、蒼を連れ、部屋を出る。

と、テレビドラマの放送が急に切り替わ

り、田狩の記者会見の様子が映る。

田狩「1「あの田狩さん、それはどういう……」

借金、俳優業での収入をすべて失い、多額の

借金を背負うことになりました。」

田狩「ニューズ番組

「や、別れた妻への慰謝料などの支出が滞り

だして、いた頃でした。」

司会「2「田狩さん、結婚されてたんですか？」

田狩「3「その類いの質問は後程お答えします。」

とせなかつた私も、資金繰りに困っていた

時に、あるバイトを紹介されました。」

田狩「3「ある医師に、治療を受けた患者を紹

介することです。治療、中絶手術、

それから、パートナートの許可のいな

いわゆるパイプカットの手術です。」

田狩「4「それは違法です、違法である」と知ってい

田狩「4「それは違法です、違法である」と知ってい

田狩「4「それは違法です、違法である」と知ってい

田狩「4「それは違法です、違法である」と知ってい

田狩「4「それは違法です、違法である」と知ってい

田狩「4「それは違法です、違法である」と知ってい

田狩「4「それは違法です、違法である」と知ってい

田狩「4「それは違法です、違法である」と知ってい

田狩「4「それは違法です、違法である」と知ってい



■ 記者会見場  
真木、背後から田狩に注射を打ち込む。  
田狩、気絶する記者が起ったかわから  
ず、呆然とする記者たち。アップしすぎて、  
星山「……田狩氏は、ヒートアップしすぎて、  
気を失ってしまっただ。継続は不可能

記者「おおいッ、それが、でも、一人紹介するごとのキ  
に「さっ、か、りつけ、せん、と、言っ、て、い  
ました、田狩さん、自信、どの治療を受け  
ましたか？」  
田狩「パイプカットです。当時から不特  
定多数の女性との関係が、返して、いた私  
の素行を、手術を受けた。事務所が、私に、  
介し、手術を受けました。もう子供を心配  
はないんだ、これからは、もう、生で  
やりまくれるんだ、から、なにも、気に、  
遊びに精を出し、関係を持ち、性全員の出来  
ましました。最終的には、計36人、出来  
現在、泣き出す。更に大量に焚かれるフ  
田狩「ッ、シ、ユ。」  
田狩「きつと、あの医者に俺の精子が弄られ  
たんだ、俺だけ、みんな、あんな病に、  
てないだけ、みん、な、い、た、隠、し、て、  
て、ない、だけ、み、ん、な、い、た、隠、し、て、  
能人は、たくさん、いるんだ、目的で、  
記者「6「弄るってのは、どういう目的で、  
田狩「俺が知るわけないだろ！（泣きながら）  
あのね、身に覚えのない子供の写真並べ  
るとね、まるでクーパーです。36色。  
子供の頃、羨ましかったな、うち貧乏で、  
買ってもらうな、か、つ、た、な、う、ち、  
れた。奴らのせいであんなガキ供を、  
そこ、に、付、け、髭、や、鬘、で、変、装、を、  
と、星山が現れ、田狩を取り押さえる。  
そこで、中継が途切れる。

というところで、会見を終了します！」  
真木と星山、気絶した田狩の肩を抱き、  
奥に引っ込んでいく。  
やがて、場内に怒号が飛び交いだす。

■公園

パパ「スマホを見つめ、呆然となるママ友たち。  
と、そこに蒼を引き連れた結子が園内に

ひっこめくる。ママたち、咄嗟にスマホを

結子「こんにちは」  
ママ友「こんにちは」

結子「いい天気ですね」  
ママ「ああ、そうですね：あの、うちも

帰ろうって話してたんで」

結子「え？」  
ママ「ええ、もう帰るよ」  
児童「ええ、もう帰るよ」

ママ「いいから！来て！」  
ママ友「素早く子供の手を引き、あ

んなら結子と蒼。姿がなくなる。キョトンと

■神代家・仕事部屋

寝ていた光太、目を覚ます。寝ぼけ眼で  
周囲を見回し、蒼がいらないことに気づく。

光太「蒼、書き置きが置いてあることに気づ

く。「仕事早上がりになった。蒼とお散歩

してくるの、ゆっくり休んでね」  
と、テレビから「パイプカット」という

単語が聞こえてくる。光太、慌てて振り

返る。画面の脇には、田狩の顔が常にワイ

プで映る。大学の教授「以前から、色彩

コメンテーターの背景について、様々な憶測  
が飛び交った。手術によって生まれた、きたものだと

要したら、その事実も含めて検証していく必要があると思います」  
光太、テレビを見ているうちに完全に目が覚める。携帯を持ち、慌てて部屋を飛び出す。

■ 商店街（夕）

結子、蒼の手を引き、不安そうに歩いている。周囲の人間が、自分たちを冷ややかに見ていることに気づく。光太からだ。と、結子のスマホが鳴る。光太からだ。結子、電話に出ようとしたら、酔っぱらった老人が、酒瓶片手に二人に近づいてくる。

老人「そんなガキ歩かせてんじゃねーよ！」  
結子「（怯える）……なんなんですか？」

老人「怒る老人にキョトンとしてる。蒼は、結子「さっきテレビでやってたぞ？」

老人「お洒落とか、可愛いとか、んなわけねえだろ！とうとうバレたな！この怪物！」

結子「失礼なこと言わないで！」  
結子「咄嗟に蒼を抱き抱え、逃げ去る。」

■ 公園

光太「息を切らしながら公園にやってくる。誰もいない。結子からだ。そこで、スマホが鳴る。結子からだ。光太「結子！今どこから結子のすすり泣きが聞こえる。」

■ 路地裏

光太「そろそろ奥に入っていく。廃品が無造作におかれた場所に、人影が見える。結子、蒼を抱き締めながら泣いている。結子「蒼を抱き締めながら泣いている。」  
光太「どういうこと？」  
結子「何も答えられないまま、結子に背

を向け、逃げ出す。

■ 神代家・リビング

ワイドショーを見ている光太の両親と瞳

子。結子は、テレビから目を逸らし、眠

る蒼を見つめている。席に、スーツを決めた

コメンテーターの席に、肩書の欄「日本の

大村豊が座っている。肩書の欄「日本の

司会者「以前から大村会長は、色彩児の危険

性を指摘されていまして、今回の田狩氏

の会見をご覧になっていかがですか？」

大村「私が彼らの危険性を指摘するたびに、

自称良識派の方々からカルト集団だ、危険

思想だといった誹りを受けてきました。が、

今回の会見でハッキリしたでしょう？」

司会「まだ、田狩氏の言っていることが本当

かどうかは？」

大村「そんな方法で生まれてきた子供たちが、

安全なワケがない！彼らを根拠なく持て囃し

たメディアの責任も重いですよ！」

困惑するスタジオの他の面々。

瞳子「瞳子、テレビを消す。」

明「うちのの仕業って決まったわけじゃ……」

瞳子「いい加減にして！結子が妊娠してから

数日、あなたたちの息子の様子がおかしか

ったこと、知ってるんですよ？」

真弓「……本当に光太の子なの？」

瞳子「……はあ？うちの子が、どっかの男と

結子「お母さん……」

真弓「そうは言ってませんけど……」

瞳子「話になんない……しばらく娘と孫はう

ちで預かりますから……」

結子「ねえ、お母さん……」

瞳子「お母さん、もういいから！」

結子「みんな誤解してる……だって、光太く

そんなことするわけがないもん。優しいし、瞳「ねえ結子、落ちないで着いて！」「た子「現実逃避でしょ？目を覚まして！」に「何かの間違いだよ。光太くんは、本当

■ 記者会見場

記者1「平坂が、壇上で深々と頭を下げています。実だということは認めませんね？なぜ今

平坂「まで発表しなかつたんです？」  
記者「もう誤解を与えろと危惧していたからです」

記者3「二年以上の月日が流れているのに、まだ不

平坂「それで、怠慢なのでは？」

記者4「それを見受けて、色彩児が危険だとい

平坂「声が国民から上がっていき、色彩児が危険だとい

記者4「変わって、彼らに危険性がないという認識

平坂「切れるんじゃないですか？」「何故危険性がないと言

平坂「困り顔で会い望む平坂の様子を、壇上

■ 繁華街（夜）

光太「とぼと歩いている。記者会見をスマホ

平坂「その様子、国内には、否が応にも

存在が確認され、国内には、否が応にも

病的な検査と、研究の発表と、児童自身

の健康状態の維持のため、色彩児を指定の

病院に速やかに入院させていた、色彩児を指定の

記者「ご両親にはお願いたく思っておりますか？」  
平坂「5「強制入院というところで勧告です」  
と、光太、たまたま覗いた映像で、壇上  
脇に小さく真木がいるのを発見する。」

■ 神代家・リビング  
結子、蒼を抱きながらパソコンでSNSを

覗いている。  
#色彩児というタグに「色つきの子供は  
赤ダニの変種」「宇宙人から来た侵略生物」  
「見つけ次第根絶やしにしろ」などとい  
った、扇情的な言葉が躍っている。

■ イベントホール・出入り口

平坂「報道陣に囲まれ、質問攻めに遭い  
ながら、報道陣に囲まれ、質問攻めに遭い  
見場を去っていく。公用車に乗り込み、会  
報道陣たちも、平坂を追っていく。やが  
て閑散としていく出入り口前。残ったの  
は、真木と星山だけ。  
真木「：言わんこつちやない。私ら、散々  
星山「：このだけの話、平坂大臣自身が、色彩  
真木「はあ？」  
星山「愛人の子供だった。だから、頑なに手  
術のことは公にしなかつたらしい」  
真木「あのクソオヤジ：」  
星山「まあ、すっぱ抜かれて失脚するの、  
真木「その問題でしょ」溜飲下げてる場合？」  
星山「振り返る。真木の姿が消えている。」  
キョトンとする星山。

■ 路地裏（夕）

真木、何者かによって羽交い締めになれ、  
口許を押さえ込まれる。  
星山の、真木を探す声が聞こえるが、や  
がて遠ざかる。

男「（声を震わせながら）落ち着け……」

だが、真木、男の拘束をすり抜け、あつ  
と、という間に手を捻り、男を投げ飛ばす。

真木「……何してんの？」  
光「……秘密にしてくれるって、言ったじ  
やないですか、妻に全部知られた」

真木「何が足にしがみついたの？」  
光「……蒼は、いっくう

光「……本当は、知ってるんだろ？ 蒼は、いっくう  
の子たちは、結局のところ、蒼は、いっくう

真木「……わかんよ、安心したの？」  
光「……爪が光太の鼻に当たって、い

真木「……息子が本当に普通の子供とかなんら変わ  
らないって納得できれば、もしかしたら、

自分家族は元通りになるかもしれないっ  
て思ってたんだけど、鼻血を流し、みっ

光「……願いますか？」  
真木「……あんなに疲れたんだよ。けど、言っとく、

光「……あんなに疲れたんだよ。けど、言っとく、

真木「……あんなに疲れたんだよ。けど、言っとく、

責任を持って歩かないよ……光太、慌ててそのあと

厚生労働省庁舎・エレベーター内（夜）  
地下に下降するエレベーターの中に乗る

厚生労働省庁舎・地下取調室（夜）  
光太は、真木の牢屋が設置されてお入り、そこに





スマホでは、妙連の見ていたエロ動画が流れ続けている。

■厚生労働省・地下取調室（夜）

光太「真木の話聞き、絶句している。

真木「何度か、妙連の証言は変化したこともあったけど、この描写だけは一言一句変わってないし、薬物反応も出てない」

妙連「最初は、渡された精子の意味がわかりませんでした。どういう意味だと聞いても、相手は何も答えてくれないし、間違うたびに暴力を振るわれました」

妙連「腹を引っ掛かれ、髪の毛をしゃぶられ、乳首を突かれ……ポロポロになりながら、彼らは何を求めているか、懸命に探し続けてみました。私はその猿の精子を顕微鏡で覗いてみました。そしたら……」

○妙連クリニック・診察室（夜）

妙連「顕微鏡を覗く。あらゆる色の精子が、円の中を蠢いている。

妙連「M……それは、まるで万華鏡でした。そして、万華鏡にはない生命力が宿っていた。その躍動を見た時、私には、自ずと答えが生まれました」

妙連「体を向ける。ボール遊びをする猿に体を向ける。」

妙連「猿、動きを止め、妙連をじっと見つめる。言いたいのですね。この遺伝子を広めると」

妙連「……やっぱ違いますよ。ごめんなさい、殴らないで！」

妙連「怯えて蹲る。だが、猿は殴ることなく、部屋を出ていく。ほっとする妙連。

妙連（M）「認められた、と思いました。同時にどうすればいいんだとも思いました」

ちた。だき連  
 こ。ろっ(Σ)妙  
 ちそうと厳連、  
 にしと厳「この  
 ばていしこの  
 らこう、生精を  
 まの、根存子メ  
 い男根抛競の  
 てな、の争持で  
 くら、ない勝強  
 るき、自信、抜  
 だ、と、の、あ  
 ろ、と、の、あ  
 う、と、の、あ  
 、と、の、あ  
 「と、の、あ

■ 妙連産婦人科医・手術室  
 妙連、が、手術台の上で眠っている。  
 瓶を取り出す。

妙連「「か？」「子供もいなく、うに見える？」  
 田狩「「か？」「子供もいなく、うに見える？」  
 田狩「「か？」「子供もいなく、うに見える？」

妙連「「か？」「子供もいなく、うに見える？」  
 患者は「「か？」「子供もいなく、うに見える？」  
 門閻者「「か？」「子供もいなく、うに見える？」  
 患者は「「か？」「子供もいなく、うに見える？」

妙連「「か？」「子供もいなく、うに見える？」  
 患者は「「か？」「子供もいなく、うに見える？」  
 門閻者「「か？」「子供もいなく、うに見える？」  
 患者は「「か？」「子供もいなく、うに見える？」

患者「「か？」「子供もいなく、うに見える？」  
 森島「「か？」「子供もいなく、うに見える？」  
 森島「「か？」「子供もいなく、うに見える？」  
 森島「「か？」「子供もいなく、うに見える？」

妙連、小瓶を開け、それを注射器に入れ、  
精巢あたりに注射する。  
やがて、田狩の精子が、七色に染まって  
き、やがてまた白に染まる。それに見と  
れる田狩。

■ 妙連産婦人科・診察室

田狩、自分の手元のコーヒーにクリーム  
を垂らす。クリームが、コーヒーに溶け、  
混ざりあっていく。それを飲む田狩に、  
妙連が近づいてくる。

妙連「ところで田狩さん、バイトしません？」  
田狩「あんた、誰に向かって言ってるの？俺  
の、見たところ、出ていくお金も多いタイ  
プの人間かとお見受けしましたが」  
田狩「……」

■ 厚生労働省地下・取調室

光太「……思いきり牢を蹴飛ばす。  
本気で取り合ったら、こんな闇医者  
の妄言に

真木「けど、あんたはこいつに手術を受けて、

光太「……（妙連に）実際に生まれてる。違う？」

妙連「……あんたらにさせたんだ？」

光太「……自分で言ったんだろ！ヤギとカラスに

妙連「……あんたの思う動物じゃない。彼らの主

光太「……は？」

妙連「……彼らはいわば、肉体を持たない有性生  
物だ。虫も鳥も動物も、本来の生物の区分  
なんて関係ない。色がその生命体で、他の生  
類だ。あの色がひとつの無理矢理植え付け  
物の肉体を、遺伝子ごと無理矢理植え付け  
て間借りしてるにすぎない。雄しかいない  
彼らは、他の雌に生殖させることではない種  
を増やせないからだ」

光太「蒼は、俺の子は、人間じゃないのか？」  
妙連「人間であって、人間じゃない。姿形は人間だが、本能や行動原理は彼らの行動原理に沿う。その証拠に、彼らは出生して数年経ち、ある程度で成長を myself が芽生えた瞬間に、彼らはある行動に及ぶ」  
光太「……何をやる？」  
妙連「侵略だよ。彼らは人間にとって代わり、地球上の万物の長になろうとしている」  
光太「……」

○ 妙連産婦人科医・診察室（夜）  
妙連「インターネットで都市伝説のまとめサイトをみている。」

「日本全国に、鬼の赤ちゃんが出没中？」  
というタイトルとともに、色彩児の粗めの解像度の写真が、沢山掲載されている。それをみて、思わずにやける妙連。だが、最初の遺伝子の強さ、美しさに惹かれ、私は、手術をするごとに得も知れぬ高揚感を味わっていた。だが……  
と、建物の外から謎の咀嚼音が聞こえてくる。思わず立ち上がる妙連。

○ 妙連産婦人科医・外（夜）  
妙連「懐中電灯を持ち、外に出てくる。音のあるほうに近づき、光を当てると、そこでは色のついた動物たちが、身体中を血で汚しながら、何かを食べている。猿の口からは、普通の色の猿の生足がはみ出ている。妙連、悲鳴をあげ、腰を抜かす。動物たちは、意に介さず食事続けている。動物たちは、綺麗さに騙され、彼らの侵略活動に動揺し、荷担していたこと気づいた私は逃げ出し、今はここにいます」

■厚生労働省地下・取調室（夜）

光太、妙連につかみかかる。

光太「何が男の味方だ！お前のせいで……」  
妙連「（微笑み）うちに来る男のパートナーは、二種類だけだ、田狩みたいな奴か、あんたみたいな奴。どっちも単純だったよ」  
光太、真木によって組み伏せられ、あつという間に妙連から引き離される。

真木「弱いんだから、喧嘩しようとするなよ」  
光太「……全部妄想だ。地球が平面とかネッシーを見たとか言い張るのと同じレベルだろ？蒼が、いつか俺たちを食い散らかして、最後は地球を征服する？馬鹿馬鹿しい！」  
真木「そっか、じゃあ時間の無駄だ。さっさと帰って、何の問題もない自分の子供を、存分に愛でてあげればいい」

光太「……」  
真木「できないから、ここにいろくせに」  
光太、何も言い返せない。

■国立総合病院・前

光太、とぼとぼと歩いている。

すると、眠る壮太を抱いた冬美が現れ、門の前にいる警備員に話しかける。  
冬美「（不安そうに）……あの、検査って」  
警備員「ああ、こちらですよ」

警備員に連れられ、敷地内に入っていく冬美。光太、その様子をただ見送る。  
と、光太のスマホが鳴る。結子からだ。

光太、出るのが躊躇うが、意を決し出る。

光太「もしもし？あの……」

結子「（明るいトーン）ねえ、まだ帰らないの？」

光太「……え、いや、結子さん？」

結子「ごはんできてるよ！」

■神代家・リビング（夜）

光太、おそるおそる部屋に入ってくる。  
テーブルに料理が並べられ、その前に座る結子と蒼が、笑って光太を見ている。

結子「おかえりー」  
 光太「ただいま」  
 結子「ごめんね、蒼起きちゃった。きつと、お父さんに会いたかったね」  
 光太「あの、あてつけなやめてよ」  
 結子「あてつけ？何が？」  
 光太「……あの、さっき病院の前通ったんだ」  
 結子「うん」  
 光太「お母さんが、子供連れてきてて。その子はオレンジなんだけど」  
 結子「えー、どっか悪いのかな？」  
 光太「俺らも、やっぱり連れていったほうがいいのかもしれない」  
 結子「なんでも？」  
 光太「……俺は。結子さんを裏切った」  
 結子「……」  
 光太「あの頃は、俺はずっと結子さんと二人がさして、手術を受けた。だから、蒼が生まれた。もうわかっているんだよ」  
 結子「そんな話やめて？蒼、いるんだよ？」  
 光太「なあ！いろいろ言いたいことはあるだろうけど、一旦置いて、国から言われ通り、蒼を病院に連れていくべきだ。奴らも、悪いようにはしないだろうから……」  
 結子「病院？なんで？こんなに元気なのに」  
 光太「そう、ほらお父さん帰ってきたよ」  
 結子「蒼、もらいな」  
 蒼「光太に近づいてくる。光太、戸惑いながらも蒼に向かっけて手を広げ、蒼をキヤッチする。その瞬間、蒼が口を開く。蒼の口の中には鋭い牙のような歯がならんでおり、光太を噛ろうとする。光太、思わず蒼を放す。蒼、床に落ちる。泣き出す蒼の口には、牙などない。結子「……何してんのよ！」  
 結子「慌てて蒼を抱き、部屋を出ていこうとする。」

結子「大丈夫？頭打ってない？病院、連れて  
 光太「待つて？俺がおぶるよ：：」  
 結子「いい、また落とされたくないし」  
 光太「そんなこと言わないで：：ほら」  
 光太「そんなに返り、蒼に触れようとする。  
 結子「触らないでよ！私の子に！」  
 光太「結子、なんだよその言い方」  
 光太「顔面に強烈なパンチを浴びせる。倒  
 れた光太、壁に頭をぶつけ、鼻から血を  
 流す。その場に崩れる。け、鼻から血を  
 結子「裏切ったとか、もうどうでもいい。ど  
 うでもよくないけど、どうでもいい。ど  
 うおうしたよ。ずうっと、思おうとしてた。  
 思おたが優しい人って。本当は全然優しく  
 あんたがいたけど、いつか優しく  
 もなかつたけど、優しくなつてくれ  
 るって、いや、優しくなつてもい  
 いから：：私はずっと待ってた。いつか本  
 当に蒼を愛してくれなかったね」  
 光太「痛みから動けない。」  
 光太「結子さん、行かないで！」  
 結子「さよなら」  
 結子、蒼を抱いたまま、部屋を出ていく。  
 光太、それを見送るしかない。

■ 総合病院 駐車場（夜）

トトラックが、院内の搬入口につけている。  
 作業服を着た男たちが、キャスター付き  
 の檻をトラックから降ろす。その中には、  
 色彩児たちが、年齢、体格に区別なく、  
 部屋中びっしりと詰め込まれている。  
 いくつもの檻がトラックに入っていく様  
 子を、真木と星山が少し離れた場所から  
 見つめている。  
 星山「彼らは喋らないから、静かでないな」  
 真木「いくら人数が多いから、静かでないな」  
 縁起悪いでしょ」





に詰め込まれていく。真木はそれを見送るしかない。

■路地（夜）

結子、蒼を連れ、怯えながら歩いている。と、ユーチューバーの集団がカメラを持ちながら近づいてくる。ユーチューバー1「お母さん、どこ行くんですか？その病院連れてかないの？」結子、蒼を庇いながら、踵を返す。だが、反対方向にも別のユーチューバーが。ユーチューバー2「おっと、行き止まり」挟み撃ちにあう結子。

■総合病院・搬入口（夜）

うなだれる真木。星山、鼻血を拭きながら立ち上がる。星山「あんた、あの子らと自分の子供を重ね合わせてるんだ。わかってるんでしょ？」真木「……」星山「さあ戻りましょう？車出して」真木、黙って立ち上がり、車と反対方向に歩きだす。星山「おい、どこ行くんだ……俺は運転できないんだよ！」真木、星山を無視し、その場を立ち去る。

■路地（夜）

真木、歩くうちに目から涙が零れている。すると、前方から騒ぎ声が聞こえてくる。ユーチューバー1「はーい、ボク？」結子、咄嗟にユーチューバー1の股間を蹴りあげる。結子「蒼に触るな！」ユーチューバー2「何してんだ、ババア！」ユーチューバー2、結子に突撃する。悲鳴をあげながら、蒼を庇う結子。だがユーチューバー2、背後から殴られ、倒れ

結子「……え？真木さん？」  
真木「いいから！行くよ」  
結子「蒼を抱え、真木とともにその場を走り去る。」

■ 神代家・リビング  
衣服や食料品が散乱し、荒廃しきった部屋の声が聞こえる。  
マネージャー（声）「すみません、あのやっぱ例のやつ、神代さん全部リスケになりまして。やっぱ今、色彩児の親っただけで、かなりイメーჯ悪くて……」  
光太、それを放心状態で聞いている。

■ ワイドショー  
半年後――内閣官房長官による、定例会見の様子。放送されている。  
記者「昨夜、元色彩児対策室の職員を名乗る女性が、SNS上に『色彩児の検査入院は全くの嘘。政府は彼らを一ヶ所に集め、虐殺しようとして』と、こういう旨の投稿をあげました。それが……」  
官房長官「（顔を歪め）……そのような人物が対策室にいたことはありません場合によつては、法的措置も検討しています」

× × ×  
司会「この件、大村さん、いかがですか？」  
大村「政府の対応が遅れてると言わざるを得ませんね。彼らが危険分子なのだと、もはや国民全員が知っているのに……」  
司会「大村さん、あの、生放送ですから……」  
大村「（カメラ目線で）私はね、今ここに国民の皆さんに約束しますよ。我が日育会は、一人残らず見つけだし、彼らを根絶やしにする」と約束しますよ！」  
画面下のコメント欄に「大村、マジサイ

コー」「政治家になって、日本を変えてくれ！」と言った言葉が並ぶ。

■ 神代家・リビング

光太の父、部屋に散乱するゴミを、ゴミ袋に放り込んでいる。

光太「：：：なあお前、もう引っ越せ。引っ越して、新しい仕事みつけて、生活立て直せよ。また絵え描くにしても、それからだ。」

それとも、まだ嫁さん待ってんのか？」

光太「：：：」

光太父「ほら（ゴミ袋を渡し）、あとお前やれ」

■ 神代家・仕事部屋

すっかり片された部屋の中。荷造りが行われていた。ペンタブや画材は、ゴミとしてまとめられている。

光太、古新聞をまとめ、紐でくくっている。だが、その途中手を滑らせ、その場にチラシをぶちまける。光太、うんざりしながら、散らばったチラシを回収する。

：：：と、その中のチラシの一枚の白面に、色鉛筆で描かれた下手くそな絵が描いてあるのに気づく。子供の絵で、人形の物体が並んでいる。

光太、目を凝らして、その絵を眺めている。うち、ハツとなる。

光太、ゴミとしてまとめられた自分の仕事用イラストノートを引っ張りだし、その中の一枚の家族イラストを開き、チラシの絵の横に並べる。似た構図。真似ているように見える。

光太、慌ててすでにまとめ終わった古新聞の紐を解き、チラシを探し出す。

× × ×

フラッシュバック。

光太が仕事で絵を描いている横で、蒼が嬉しうにその様子を眺めている。

やがて、クーピーを引っ張りだし、チラ

シの白面に蒼が光太の絵を真似た絵を描  
き出す。その姿、とても楽しそう。  
× × ×  
床に、足の踏み場なく絵がびっしり並べ  
られていて。全部、蒼の絵だ。それを見  
つめる光太の目から、やがて涙が零れる。  
光太父、部屋に入ってくる。すっかりま  
た散らかった部屋を見て、面食らう。  
光太、急に部屋を飛び出す。わけがわか  
らず、呆然とする光太の父。

■ 公園・前

光太、慌てて敷地内に入ってきて、周囲  
を見回す。公園で遊んでいたパパ友たち  
やその子供たちが、光太の出現にぎよつ  
とする。

光太「蒼ー！蒼！どこにいる？俺が悪かつ  
た！だから、戻ってきてくれ！蒼……」  
怪訝な顔で、光太を見るパパ友たち。

■ 結子の実家

申し訳なさそうに、瞳子と対峙する光太。  
瞳子、慥然としたまま、タバコを吸う。

結子「私のここには連絡ないよ、何もね」  
光太「そうですか……心当たりとかは」

瞳子、光太の額にタバコの火を押し付け  
る。熱さから、仰け反る光太。

瞳子「今更父親ヅラとか、超笑えるね」  
光太、何も言い返せない。

■ 興信所

光太、延田に結子と蒼の写真を差し出す。  
延田、結子と蒼の写真を受け取り、一瞥  
すると、乱暴に放る。

光太「なににするんだ！」  
延田「日育会も、彼らのことを追ってるの、

知ってるでしょ？搜索途中にバツティング  
したりしたら、危ない。この類の依頼は幾  
つかありました。が、当事務所としては、受



色彩児の母親たち、子供をおぶりながら、  
校庭に洗濯物を干している。

その中に、結子の姿もある。

延田（Σ）「確証はありせんが……そして、オ  
フ会ってのは、つまり襲撃の呼びかけです」

#### ■興信所

光太、延田に掴みかかる。

光太「どこだ、結子と蒼はどこにいる？」

延田「……落ち着いて。情報漏れのないよう、

連れていかれるまでわからなはいはずです。

行けるのは、襲撃部隊に志願した者だけだ」

光太「……俺に、こいつらの仲間になれって？」

延田「襲撃部隊に潜り込んで、襲撃する前に

彼らからはぐれ、奥さんと息子さん救出

する。それしか方法は残されてません。決

行日は、もう明後日だ。時間がない。あ

んたがやるしかないんだ」

光太「……」

#### ■貸し倉庫・入口

出入り口の扉に張り付く、見張り役の男。

見張り「ここに、そろそろと光太が近づく。」

光太「免許証を差し出す。だが、名前が

「田原一郎」という別名になっている。」

#### ■貸し倉庫・内

老若男女様々な人間が、暗い目をして座  
っている。その中に、光太の姿もある。  
国守（31）が、皆の前にたち、スピーチ  
をしている。

国守「……大村先生は多忙のため、今回のオ  
フ会には参加できなくなりました」

ざわつく、新会員の面々。

国守「ですが先生は、皆様の勇気ある決断を、

**先生**は大変喜んでおられます……これから

私たちが決行することには、今はまだ世間の

人が知れば眉を潜める正しいのかもしれない。

それでも君たちは何が正しいのかを判断し、



新会員の皆、光太に大きな拍手をする。  
それを受ける光太、歯を食い縛る。  
× × ×  
真っ暗な部屋の中。会員たちが、雑魚寝  
をしてる。息を潜めながら、スマホ  
その中の光太、絵を描いてる。  
の明かりを頼りに、絵を描いてる。  
小さな子供の絵だ。  
近くの会員が寝返りをうつと、光太、慌  
てて絵を隠す。しばらく様子伺うと、  
また再開。線が描きあがると、光太、そ  
れを色鉛筆でピンク色に塗っている。

### ■ 廃校舎・教室（夜）

少量の食事が、勉強机の上に並ぶ。  
色彩児母子たち、勉強机を寄せあい、食事を  
している。だが、皆満足してない様子。  
食べ終わった蒼、皆満足してない様子。  
している。かろうじて、人の形をしてい  
る。

結子「ほら蒼、行儀悪いでしょ」

隣の席の母親「（蒼の絵を見て）すごいわね」

結子「そんな大したもんじゃないですよ」

隣の席の母親「いや、普通2歳ぐらいが描い

ても、全然絵にならないもん（蒼に）これ、

お母さん？」

隣の席の母親「苦笑いする結子。」

結子「蒼を抱っこし、その目を見つめる。」

結子「君は、本当に絵が好きなんだね」

と、母親の一人が、慌てて教室の中に入

って行く。

色彩児の母親「テレビつけて！早く！」

母親「リモコンでテレビをつけている。ニ

ユース番組。星山が会見を行っている。

星山「昨日、入院している色彩児の

うち、八人の死亡が確認されました。死因

は今のところわかっています。

騒然とする母親たち。

そこに、「大嘘だ」という声が聞こえる。



振り返る母親たち。

真木が、スマホを弄りながら入ってくる。

真木、エンターボタンを押す。

記者1(「」)「……今、例の元対策室職員のア  
カウントから、『今の会見は大嘘。彼らは国  
に殺された』という投稿が上がってますが」

星山、苦虫を噛み潰したような顔に歪む。

星山(「」)「……全くの事実無根です」

真木「それしか言えねーのか、ボンクラ」

記者2(「」)「それと、『しかし今会見している

星山という男は、嘘つきではない。彼は単

なる有能なスピーカー。言えと言われたこ

とは一言一句変えない。それ以上でもそれ

以下でもない」と

星山、苦笑いをする。

母親たち、真木に拍手をする。

真木「(母親たち)これでわかったでしょ。私

の言う通りになってる。奴らは子供を殺し

にかかっている。それは、子供を預けなかつ

たあなたたちだ。だって例外じゃない」

母親たち、みな一様に自分の子供の顔を

見つめる。

と、そこにブザーが建物内に鳴り響く。

怯える母親たち。

真木「モニター切り替えて、早く」

色彩児母親1、チャンネルを替える。山

の映像が映る。ダンプリンが数台走り、山

荷台には人間が一台に十数人乗っている。

### ■ 山道(夜)

山道を走るダンプリンの上。皆、角材や

金属バットを持っている。

その中に、光太も紛れている。

### ■ 廃校舎・教室(夜)

ブザーが鳴り続けている。慌てて身支度

真木「落ち着いて！奴らがここにたどり着く

しまでにまだ時間がある。事前に退路は確保

したでしょ？……神代さん、先頭は任せた」

結子、怯える蒼を抱きながら、真木に寄ってくる。

結子「真木さんはどこに合流するんですか」

真木「私はここに残って、奴らを食い止める」

結子「そんな、先生……真木さんがいなくて、

私たちが、これからどうすれば」

真木「大丈夫、私なんかいなくても、あなた

たちは十分やっついていけるから」

結子「何で、真木さんは、そこまで……」

真木「……今は時間がないから。あとは合流

したら、またゆっくり話そう、ね？」

結子「それじゃあ、ひとつだけいいですか？」

真木「なに？」

結子「口許にケチャップ、ついてます」

真木、照れ臭そう口許を拭う。互いに笑

### ■ 廃校舎・裏門前（夜）

色彩児の母親たち、点呼をとっている。全員の確認がとれると、色彩児を連れた母親たち、その場を去っていく。

### ■ 山道（夜）

ダンプカーの上で、武器を構え、戦闘態勢の会員たちが進行方向に、灯りのついた廃校舎が見える。光太、誰かが立っている、校門の前に、真木だ。

会員「どの発見する。真木だぞ！」

瞬間、車が巨大な落とし穴に落ちる。次の

続の車も、続けて落とし穴に落ちる。後

### ■ 落とし穴・内（夜）

深く掘られた穴の中。ひっくり返った穴内。そこから死ね落ちた。会員たち。気が失った者、死んだ者……意識のある人間たち、穴をよじ登る。

会員 うとするが、外から投石が降ってくる。

真木（声）「殺す気だよ！無抵抗な女子供を傷つけるような奴ら、全員死ねばいい！」  
気を失っていた光太、起き上がる。投石をかわしながら、よじ上ろうとする。

■ 廃校舎・校門前（夜）

真木、落とし穴の中に投げ込み続けるが、やがて息が上がリ、バテていく。

真木「全く、こいつら何人いるんだ……」

と、穴から男の手が、穴の外につき、男もよじ登って来ようとする。

真木、手に近づき、上がってきた男を石で殴ろうとする。

だが、上がってきた男は光太だった。真木、すんでのとところで手を止める。

光太「（慌てて）結子さん、蒼はどこだ？」  
真木「あんたに、そんなこと聞く権利ないよ！」

光太「……後ろ！」  
真木「え？」

真木、後ろを振り返る。いつの間にか国守に背後をとられていた。国守、真木の頭を巨大な石で殴る。倒れた真木の頭を、国守は何度も何度も石で打ち付ける。血に染まり、やがて動かなくなる真木。光太、それを見ているしかない。

穴の中から、生き残った会員たちが、次々這い上がってくる。

国守「よし、まだ動ける者たちは、四班に合流して、逃げた母親を追え」

真木「（息も絶え絶え）……合流？」  
国守「残念だったな。俺たちがお前らの退路

を考えてないとも思ったか？……これだから女は。つくづく戦いに向かないな」  
真木の目から、悔し涙が零れる。構わず去っていく国守。  
男たち、やがて裏手に消えていく。残されたのは真木と光太。光太、震えながら真木の身体を揺らす。

光太「おい、すっかりしろ！」  
 真木「(虫の息)早く行きな、手遅れになる」  
 光太「なんでここに……関係ないんだろ？」  
 真木「夫婦揃って同じこと聞くね」  
 光太「……結子は、やっぱりここにいたのか？」  
 真木「ここに理由ね。誰かに話してみたいと思っただけもあるけど、ここまで来たらもう墓場まで逃げ切るよ……いや、やっぱ最後にいいかな？」  
 光太「なんだよ！」  
 真木「……ごめんね」  
 真木、その言葉を残し、息絶える。  
 光太、真木の目を閉じて、その場を去る。

○墓地

真木、目を覚ます。わけがわからず、周囲をキョロキョロ見回す。  
 眼前に、水子地藏がある。  
 と、そこに十数人の色彩児が現れ、真木によってくる。その中には、壮太の姿も。  
 真木、子供たちのことを抱き寄せ、やがてぼろぼろと泣き出す。  
 真木「(泣きながら)ごめんね……ごめんねえ」

■山道(夜)

色彩児を連れた母親たち、明かりもないままに山を下っていく。  
 結子の袖を、蒼がぐいぐい引っ張る。  
 結子「なに、お腹減った？もう少し待ってね」  
 だが、背後に小さく火の手が見えるのを、母親の一人が発見し、悲鳴をあげる。  
 結子「……って、追ってきてる？」  
 色彩児の母親2「てことは、真木さんは……？」  
 結子「今は、まず逃げ切ることに専念しよう……必ず合流するって、約束したんだ」  
 母親たち、足取りを早める。  
 だが、前方からも小さな火の手が覗く。  
 母親たちの足が止まる。日育会の面々に挟み撃ちにあう母親たち。  
 国守、母親たちの前に立ち塞がる。

国守 「もう逃げられないぞ」

× 光太、全力疾走し、結子たちを追う。だが  
× すぐに息が上がり、スピードが緩まる。

× 男たち、二手から母親たちになじり寄る。  
母親たち、身動きがとれない。

国守 「……おとなしく子供だけ渡せば、母親  
だけは傷つけず助けてやりたいんだよ？ 最  
後の子ヤンスだ」

母親たち 「……」  
× 光太、へろへろと走り続ける。  
× 光太「結子さん、蒼、必ず行くから……」

光太「力を込め、スピードをあげようと  
する。だが次の瞬間、木の値に足を引  
掛けたら、崖で、山道の脇に突っ込む。

× そこは崖で、光太、落下する。  
× 母親たち、誰も動こうとしない。  
国守「ため息をつき、手を掲げる。日育  
会の面々たち、母親たちに襲いかかる。

× 樹海を転がり落ちる光太。  
× 「寄越せ」「殺すぞ」という怒号を発しな  
がら、母親たちから、子供を引き剥がそ  
うとする。

泣きわめく色彩児たちを、必死で庇う母  
親たち。だが、日育会の面々は容赦なく  
母親たちを殴り、色彩児を引き離す。  
大村「もういいよ！ ラチ明かねえから、これ  
以上抵抗するなら、親子仲良くやっちな  
蒼を庇う結子を、日育会の一人が、角材  
を振り上げる。

そこに、脇の樹海から光太が落ちてきて、  
結子を殴ろうとしていた会員の前に飛び  
出す。光太、咄嗟に男を殴り、倒す。  
光太、状況を把握できないまま起き上が  
る。蒼を抱き抱える結子と目が合う。

光太「（周囲を見て）……結子、蒼」  
光太「よるよると結子に近寄る。だが結子、そっぽを向く。」  
光太「待って、色々言いたい！ いろいろけど……」  
結子「（遮って）いい！ いい！ あんたの言葉なんてもう聞きたくないから！」  
光太「助けにきたんだよ！ 守りたいんだ！ 結子さんも、蒼のことも」  
結子「……あんなにどうやって？ 私と蒼を守るの？ 言ったけど、どうやって、あんたのこと父親だなんて……」  
と、結子、いつの間にか蒼が自分の手元からいなくなっていることに気づく。  
結子「……蒼？ 蒼！ どこ？」  
光太「蒼を探すが、その途中に何者かに殴られる。顔を上げると金属バットを持ってた国守がいる。その場で蹲る光太。」  
国守「私は君を買ったの。残念だ。」  
光太「国守にすが、国守は光太の足や腕を殴り付け、光太を動けなくする。と、国守の前方に蒼がぼうっと座っている。結子も光太も、蒼に気づく。」  
結子「……蒼！ 来ないで！」  
振りに上げる。悲鳴をあげる結子。金属バットを振り上げるお！」  
光太「……その時、蒼の口が大きく開き、国守の頭に向かって跳び跳ねる。蒼の口の開きに、スポットと収まる国守の頭。蒼、国守を食べ出す。国守、抵抗するが、すぐに血が蒼の口から吹き出し、絶命する。……他の子供たちも、蒼と同じように口が開き、今まで自分を襲っていた日育会のメンバーをばくばくと食べて出す。蒼、あっという間に、国守を食べ終える。口をもぐもぐしたあと、服の残骸を吐き出す。満足気な顔は、あどけない。光太と結子、それを見て呆然としている。」

光太「本当だったんだ……奴らの言っていたこ  
 と」  
 蒼、結子を見つげ、とこととやって来  
 る。光太、思わず蒼を避けるが、結子は  
 蒼を受け入れ、抱き締める。  
 光太「……おい」  
 結子「怖いのか？」  
 他の色彩児たちも、皆母親の元へ帰って  
 いく。母親も、それを受け入れる。困惑  
 する光太。  
 結子「前にも言ったじゃん。私はいま目の前  
 にいる蒼を可愛がるだけだよ！それだけだ  
 よ！そうするしかないでしょ？覚悟してん  
 だよ！ここにいますか！」  
 結子、蒼と共に歩きだし、光太をスルー  
 する。  
 結子「……怖いんですよ？逃げたらいいよ。  
 ずっとそうしたかったんですけど？」  
 他の母親たちも、結子に続き歩きだし、  
 光太「その場をあとにしようとする。」  
 光太「母親たちの足が止まる。」  
 光太「俺はお前たちを守れるような男じゃな  
 い。結子さんにも愛想つかされて、信頼も  
 戻らないのかもしれない。でも、それでも！  
 俺は蒼の父親だし、それは変わらない！」  
 光太、自分の懐から、紙を取り出し、蒼  
 に見せる。それは、蒼の似顔絵だ。  
 光太「お前に見せたくて描いた……お俺には、  
 これしか蒼に胸張れることがないから」  
 結子「……わかったよ、光太くん。よーく」  
 結子、蒼の耳元に何かを囁き、光太のも  
 とへと歩かせる。  
 蒼が、光太に近づく。光太、怯えながら体  
 が震えている。それを必死で抑えながら、  
 手を広げ、蒼を迎える。辿り着いた蒼を、  
 おおそるおそる抱き締める光太。蒼も、光  
 太のことを抱き返す。

■ ニュース番組

厚生の労働相の玄関で、星山が報道陣に困  
まれのマイクを向けられていた。起きた大  
記者1「星山室長、神奈川の山奥で起きた大  
量殺人の件、一部では『とうとう色彩児が  
覚醒した』との言説もあります。いかが

星山「事実無根です！」

記者2「現在も、色彩児は安全かどうか？」

星山「変わらなせん！通して！色彩児が全員死亡

記者3「検査入院していた色彩児が全員死亡

星山「お答えの関連性は？」

× 星山「車に乗り込み、去っていきせん！」

× コメンテーター席に座る大村、号泣して

大村「（泣きながら）：：：死んだのは、我が日

司会「失礼ですが、大村さん、日育会は何を

大村「彼らは、山奥に潜伏する色彩児とその

両親に入院を勧めただけ！それなのに

尊い若者たちの命が犠牲になっただけなのに

■ 山道

血や服が、あちこち飛び散った現場。  
警察による現場検証が行われる中、警官

警官「一人が、指揮官に近づいてくる。警官

警官「こんなものがない紙を渡す。警官

血で汚れた、光太の絵が落ちてある。そ

れは蒼の似顔絵だ。

■ 廃ビル・内

大村、目を覚ますと、自分が柱に括りつ

けられていて、自分が柱に括りつ

大村、慌てて周囲を見回す。廃墟の中に、

パーティ用の飾りつけがさがされている。



そして、その中心に、結子と蒼がいる。  
結子「……あ、先生。おはようございますー、

大村「……寝れました？」

結子「先生が、ずっと会いたがってた、色彩

大村「……私をどうするつもりだ」

結子「今日ねえ、この子の誕生日なんですよ。

大村「3歳になるんです」

大村「だからなんです……？このガキは、い

つか我々を滅ぼすんだぞ？まさか、親だか

らって大丈夫とでも思ってるのか、甘いん

だよ！いつか、お前だって食われるんだ！」

大村「……」

結子「私にできることは、この子が大人にな

るまでちゃんと食べさせて、面倒をみるこ

と。それが私の責任だから……世界が滅び

る？知ったこっちゃないし」

蒼、大村にとびかかる蒼。大村の悲鳴が、

結子「建物中にこだまする。」

結子「……部屋の飾りに紛れ、蒼が描いた拙い

絵がたくさん貼られていて、その殆どが

家族が楽しく遊ぶイラストで、ピンク色が

の子供、母、そして父の三人が描かれて

### ○山道

光太「蒼……蒼の……」

光太「……蒼の……」

光太「……蒼の……」

光太「……蒼の……」

光太「……蒼の……」

光太「……蒼の……」

光太「……蒼の……」